

教育コンサルタント 末永先生が語る

センター試験廃止後はどうなる！

新中学一年はあと4年で大学入試!?

その①

現中学生や高校生にも影響が及ぶセンター試験廃止後について、本誌連載中の教育コンサルタント 末永先生にお話を伺いました。

戦後最大の大学入試改革が行われようとしています。いえ、大学入試だけではありません。それに伴って高校・中学入試も劇的に変わろうとしています。これは遠い未来の話ではありません。また、センター試験が廃止される現中学一年以下の生徒にとっただけでなく、実は小学・中学・高校、すべての生徒に今すぐ影響を及ぼす、非常に大きな教育改革となりつつあるのです。

文部科学省の中央教育審議会が2014年12月に「高校教育―大学教育―大学入学者選抜の一体的改革(案)」という答申を、下村博文文科大臣に提出しました。厳密にはこの答申を受けて、国会で承認されることで決定事項となるのですが、これまで中央教育審議会の答申が覆されたことはないのです。この答申がほぼ確定と考えても問題ないでしょう。

答申の中にはセンター試験廃止や、それに代わる新しい二種類の試験について記載されています。そのほかにも多くの重大な改革が含まれ、この改革に向けて大学だけでなく、すべての教育機関が大きく変わろうとしているのです。

なぜ今、大学入試改革が必要なのか?

なぜ、このような大学入試改革、教育改革が必要なのでしょう。実はこれまでも、現代教育の問題

点の多くは大学入試にあると指摘されてきました。現在の大学入試は知識量を中心とした「知識の暗記・再現」に偏っており、高校の授業も知識詰め込み型です。知識量中心の学力を中央教育審議会は「従来型の学力」と呼んでいます

が、高質な情報が進む現代では知識は重要でなくなってきたのです。

例えば、今どきの生徒は分からない問題があれば、スマホでその解答を調べます。化学で用いるイオン式や歴史の出来事、数学の公式・解法などが簡単に検索できるのです。このように現代社会では、知識の暗記・再現にはあまり価値がないことが分かります。そのため「思考力・判断力・表現力等を含む生きる力」を問う、「21世紀型の学力」を評価する大学入試へと変える必要があるのです。

大学入試改革は非常に困難であり、これまでもなかなか実現しませんでした。しかし、生産年齢人口の急減、労働生産性の低迷、グローバル化・多極化が進む現代社会において、世の中の流れは一般に予想するよりもはるかに早く、職業のあり方も変化しています。ニューヨークタイムズの11年

の段階では誰にも分からないので

どのような入試改革が行われるのか?

4つの大きな変更点

具体的に答申に記載されている大学入試改革には、大きく四つの変更点があります。

一つ目はセンター試験を廃止し、高校教育の基礎的学習の達成度を把握する「高等学校基礎学力テスト(仮称)」、センター試験に代わる二次試験レベルの難易度の「大学入学者希望者学力評価テスト(同)」の二種類を導入することです。これらの試験は、どちらも年に複数回行われる予定です。

二つ目は個別試験(二次試験)の変更です。ペーパーテスト主体ではなく、大学側のアドミッシヨン・ポリシー(自校の特色・教育理念に基づいてどんな学生像を求めめるか)に合う学生を大学側が選抜するとしています。

三つ目はAO入試・推薦入試の廃止です。現在は約40%の学生がAO入試・推薦入試を利用して入学を決めています。AO入試や推薦入試が本来の目的から外れているケースも多く、20年にはAO入試や推薦入試は撤廃される

これまでの大学入試の問題点とは?

ほかにも、現在の大学入試はさまざまな問題点をはらんでいます。少子化による学生数の減少により、多くの大学で学生不足に陥っていると聞きます。そのため一部の私立大学では経営を維持することが困難になり、偏差値が極端に低い学生の入学を許可せざるを得ない状況です。その結果、「みんなが行くから」「就職に有利だから」と、とりあえず大学に入る学生が増えています。

最近の大学生の中には小学校の算数や中学校の数学ができなかったり、中にはアルファベットが正しく書けない学生まで現れたと聞きます。大学側は「入学後にフォローします」と生徒や保護者にアピールするようですが、文科省は大学にふさわしくない授業を問題視しているようです。

逆に学力の高い東大や京大では、現在の入試制度のセンター試験は簡単過ぎて、評価の対象にならないようです。東大の大多数の学部はセンターと二次試験の比率を1対4とし、東京工業大学は1―7類すべてでセンター試験をまったく得点化していません。多くの大学が学部によってセンター試験の

比率を変えており、二次試験で最終調整を行っています。これでは、各大学別の試験の代わりとしてスタートしたセンター試験は、役割を果たしていないこととなります。現在の大学入試では点数が一点刻みで、ほとんどがその点数のみを評価するので、生徒個人の特性や能力は測れません。そのため、中学や高校の授業は大学入試対策になりがちで、生徒の特性や個性を伸ばしにくく、知識詰め込み型教育になっていきます。特に、英語では読む・書くに特化しており、コミュニケーション能力を軽視する傾向にあり、英語教育を六年間も受けても「実際には使えない」との批判がかねてより出ています。

さらにグローバル化が進む中、日本の学生に欧州と比べてチャレンジ精神が少ないことも問題で、文科省は留学する生徒の少なさを指摘しています。そのほか、一年に一回の入試制度では、本番に体調不良などのトラブルで実力が発揮できなかった場合、一年間の浪人生生活を余儀なくされるという点も問題でした。

以上の観点から、文科省は大学入試改革を進めようとしているのです。今は大まかな方針が立っているだけで、詳細はこれからです。具体的にどう変化するのは、今

予定で、それに代わる別入試方法を検討中です。

四つ目は、外国語(ほとんどは英語)の入試に外部外国語検定試験を利用できる制度に変更することです。こちらも、年一回だけの入試に対し、複数回挑戦できる利点があります。さらに世界基準を満たした外部外国語検定を利用することで、国際的な英語力を学ぶことにつながります。(次号へ続く)

※以上は、14年12月の答申案から分かることや予測されることです。



教育コンサルタント 末永 吉晃先生

Profile

教育コンサルタント、完全個別指導学習塾のTOPS吉津校塾長。福山市内の受験指導に定評があり、各種メディアや塾業界からも注目を集める。毎年、大逆転で第一志望校に合格する生徒を多数輩出している。

☎084(922)0636 (福山市吉津町10-3) <http://www.mutant.jp/>